

からの水準測量で得た標高は40m前後と10m余の差が認められた。そのため、われわれは再度水準測量を行なったが、数値はほとんど変わらず、1/50,000の地形図「石垣島」が大正10年の測量をもとにしている点を考慮して、われわれの測量で得た標高を正しいものとした。

- (2) 滝口宏他『沖繩八重山』 1960年。
- (3) 当真嗣一他『石垣島の遺跡—詳細分布調査報告書—』 沖繩県教育委員会、1979年。
- (4) 鳥居竜蔵『有史以前の日本』 1925年。
- (5) 三上次男他『ヤマバレー遺跡発掘調査概報』ヤマバレー遺跡調査団、1977年。「沖繩・石垣島ヤマバレー遺跡第2次調査概報」『青山史学』6、1980年。
- (6) 註(2)に同じ。
- (7) 当真嗣一他『平得仲本御嶽遺跡発掘報告』 沖繩県教育委員会、1976年。
- (8) 知念勇他『カンドウ原遺跡発掘調査報告』 石垣市教育委員会、1977年。
石橋新次他『カンドウ原遺跡緊急発掘調査ニュース(1977年度)』 沖繩県教育委員会文化課、1978年。
- (9) 岸本義彦他『ナガタ原貝塚・船越貝塚発掘調査報告書』 沖繩県教育委員会、1979年。
- (10) 大浜永亘・関口広次「八重山群島出土の古陶磁について」『物質文化』31、1978年。
- (11) 当真嗣一他『フルスト原遺跡』 石垣市教育委員会、1977年。
- (12) 大城慧他『筭若東遺跡緊急発掘調査報告』 沖繩県教育委員会、1978年。
- (13) 安里嗣淳他『石城山緊急発掘調査概報』 沖繩県教育委員会、1978年。

第2節 調査方法

前述のように(第Ⅱ章、第1節参照)、仲筋貝塚は貝層の点在する列点貝塚であり、しかも現在畑地として利用されているため、当初から耕作による攪乱が著しいことが予想された。したがって、畑の作物を荒らすことをできるだけ回避し、同時に耕作による攪乱の比較的少ないと考えられた県道南側の畑と畑の地境にある2カ所の貝層(各々を北貝層、南貝層と仮称する)を中心に調査区を設定することにした。調査区のグリッドは4m方眼とし、磁北より西へ15°の方向で地区割りし、任意に南から北へA~M、東から西へ1~9の番号をつけた(Fig. 3)。このグリッドに従って、まずE-5、G-5、I-5、K-5の西半分を発掘し、状況をみてこれらを適宜拡張することにした。その結果、J-5・K-5グリッドにあたる北貝層はほとんど攪乱を受けていないことが判明し、そこを集中的に発掘した。最終的な調査面積は55㎡である。また、これと並行して調査区を中心とした付近の地形測量を行ない、1/100、25cmコンタの地形図を作成した。なお、貝層の貝、獣骨、魚骨等のサンプリングは適宜行ない、とくに貝についてはG-5、K-5グリッドで任意の50cm四方のスポットを設けて柱状サンプリングを行

なった。

(谷川 章雄)

第3節 標準土層

仲筋貝塚の標準土層を示すものとして、ここではE-5グリッド土層断面図をあげておく (Fig. 4-1, PL. 1(2))。土層は次のような4層に分けられる。

第Ⅰ層 暗褐色砂層。耕作土。耕作による攪乱が著しく、しまっていない。

第Ⅱ層 黒色砂層。よくしまっているが、やはり耕作による攪乱を受け、そのために第Ⅲ層のブロックが部分的に見られる。

第Ⅲ層 黄褐色砂層。しまっていない。攪乱は部分的に第Ⅲ層上面まで及んでいる。

第Ⅳ層 赤褐色砂層。下層にいくにしたがって粘土を多く含むようになり、粘性に富むようになる。

これら4層の土層のうち、遺物を包含しているのは、第Ⅰ層～第Ⅲ層上面であり、第Ⅲ層・第Ⅳ層が本遺跡の地山である。そして、後述するように (第Ⅱ章、第4節参照)、貝層は基本的には第Ⅲ層上面より上部に形成されており、遺物包含層と貝層は層位関係において一致している。また、耕作による攪乱はE-5グリッドで見える限り、一部第Ⅲ層上面まで、すなわち部分的には遺物包含層下部に及んでいるが、J-5・K-5グリッドの北貝層はほとんど攪乱を受けていない状態で検出された。この点については第4節で詳しく述べることにする。

(谷川 章雄)

第4節 貝 層

今回の調査の対象となった2カ所の貝層は、地表からの観察ではいずれも南北に長径をもつ楕円形を呈し、斜面に貝等を投棄した状態をよく示している。北貝層は地表面では $9 \times 5.5 m$ の大きさがあり、南貝層はそれよりやや大きく $11 \times 5.5 m$ である (Fig. 3)。

南貝層の状態はG-5グリッド西壁土層断面図において確認できる (Fig. 4-2)。土層の堆積状態によくあらわれているように、このグリッドは規則的に第Ⅲ層上面に達する攪乱を受けており、犁耕によるものと推定される。そして、第Ⅰ層には貝を包含しているが、第Ⅱ層にはほとんど貝の包含が見られない。こうした状態はG-5グリッドが南貝層の縁辺にあたるために貝層が流れたものと理解するか、あるいは攪乱による「天地返し」のような状態と理解するか判断に苦しむところである。また、この貝層が第Ⅱ層上面に形成されたという可能性もあり、そうであるならば次に述べる北貝層よりも時期が新しいものと考えなければならない。しかし、出土遺物の点で南貝層が北貝層よりも新しい様相は見い出せず、現段階ではこの考えには否定的である。いずれにせよ、畑の作物の関係等でこの貝層を全掘できなかったため、こ

では上述の可能性を指摘するにとどめたい。

北貝層はJ-5・K-5グリッドにおいて明瞭に検出され、ちょうどグリッドを南西から北東に横切るように带状の混砂貝層が確認された。そして、K-5グリッドではこの混砂貝層に接して混貝砂層が北西へ広がっている(Fig. 5)。I-5・J-5・K-5グリッド土層断面図(Fig. 5-1・2・3・6・7, PL. 2(1)・4(2))でよくわかるように、この貝層は第Ⅲ層上面に形成されており、とくにK-5グリッド東壁(Fig. 5-7)で貝層が一部地表面に露頭していることを考えれば、あるいはこの貝層は形成時にはマウンド状に盛り上がり地表面に露頭していたものが、後世の耕作等によって削平されたのかもしれない。また、貝層の厚さは、I-5グリッドでは最大14cmであるのに対して、J-5グリッドでは最大26cm、K-5グリッドでは最大40cmと南にいくに従って厚くなる。これはJ-5・K-5グリッド(Fig. 5-3・7)に見るように貝層が傾斜していることともに、斜面に形成された貝塚の特徴と理解される。この貝層は分層することが不可能な単一の層であり、しかも貝層の厚さがあまり厚くないことから推して、形成期間は比較的短いものであったと考えられる。したがって、貝層中の遺物の時期差もあまりないと判断してよいだろう。

なお、I-5グリッドにおいて第Ⅲ層上面にサンゴ石灰岩塊の集中が見られたが(Fig. 5, PL. 4(1))、焼土、炭化物、遺物等も認められず、現段階では遺構とは考えられない。

以上述べてきたように、今回調査した仲筋貝塚の貝層は比較的短期間に斜面に形成されたものと理解されるが、こうした小貝層は石垣島では平得仲本御嶽遺跡⁽¹⁾やカンドウ原遺跡⁽²⁾などの集落址においても確認されており、また芋若東遺跡⁽³⁾、石城山遺跡⁽⁴⁾、ヤマバレー遺跡⁽⁵⁾においても遺物包含層より貝類が出土している。これらの遺跡はいずれも八重山考古学の編年上、第Ⅲ期⁽⁶⁾(13~15世紀)に属しており、このことは当時の人々の生活において貝類の採集・食用が一般的であったことを示している。とくに、陸産の貝類であるかたつむりは、本貝塚をはじめとして(第Ⅲ章、第4節(1)参照)、山原貝塚⁽⁷⁾、平得仲本御嶽遺跡⁽⁸⁾、芋若東遺跡⁽⁹⁾、石城山遺跡⁽¹⁰⁾においてオキナワウスカワマイマイが出土しており、その食用が広く行なわれていたことを推測させる。そして、文献上では『李朝実録』所載の15世紀末の済州島民の漂流記⁽¹¹⁾に西表島祖納、波照間島、黒島のこととして「其の俗、蝸を煮て之を食す」という記事が見え、考古学上の所見と一致している。こうした貝類がどのような方法で調理されたかは不明であるが、石垣島の民俗例では汁物や酢の物にされ、とくにかたつむりは雨降りのときは2、3升も拾えるので、壺の中に入れておいて糞を出させて、ういきょうと煮て汁物にしたという。また、かたつむりはたにしとともに下げ薬で肝臓病、腎臓病に効めがあるという⁽¹²⁾。このように、貝類の採集・食用は当時の人々の生活において一般的であったと考えられるが、今後は貝層出土の自然遺物のより精密な分析を行なうとともに、列点貝塚もしくは小貝層がその時期の集落構造とどのような関係をもっていたかという点が問題となるのではないだろうか。

(谷川 章雄)